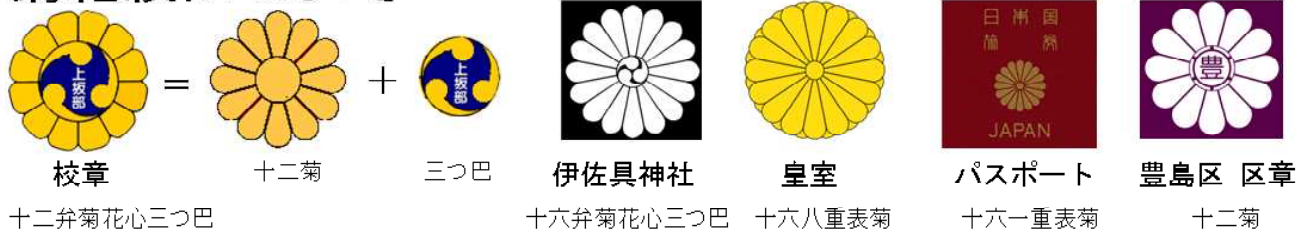


校章 菊花紋と巴紋の意味するところ

菊花紋について



紋章は標識やマークと違い、見た目に意味はわかりにくいですが、実に奥深いものがあります。観賞用の菊は奈良時代に中国大陸より伝わりました。日本では最も高貴な花として「百花の王」「群芳の貴種」と、もてはやされました。鎌倉時代には後鳥羽上皇がことのほか菊を好み自らの印として愛用、その後後深草天皇・亀山天皇・後宇多天皇が継承しました。そして慣例のうちに菊花紋、ことに十六八重表菊が皇室の紋として定着しました。江戸時代には使用自由となって庶民にも浸透、和菓子や仏具の飾り金具に用いられる等、全国各地に広まりました。しかし明治当初には、社寺で使用されていた菊紋も、一部の社寺を除き一切の使用が禁止されました。その後、徐々に社殿の装飾や幕・提灯に菊紋の使用を許され、1879年一般の社寺でも神殿・仏堂の装飾として使用することが許されるようになりました。

巴紋について



三つ巴の紋様は家紋としても古く用いられ、全国各地の神社の神紋としても多く見られるようになりました。軍神を祀る八幡宮の殆どが巴を神紋とするのは、弓具の鞆(とも)という部分の側面と形が似ているからです。「ともえ」の呼び名は「鞆」の絵柄を「鞆絵」と称したことに由来するようです。また、「ともえ」の漢字は、人が腹ばいになる姿を表す巴という象形文字を形の類似から当てました。

紋様の意味については、我国では水の渦を巻く形が「ともえ」模様 の原型とされているようです。神社建築において、社殿の軒瓦に巴紋を付けることは魔除けや防火の意味があります。西欧や朝鮮では蛇の形から来ていますし、また中国では雷または雲の形から来ているとされます。

巴紋は、その数により一つ巴、二つ巴、三つ巴…と分かれています、その旋回する頭の方向により、頭から時計の針と同じように右回りのものを「右巴」とし、その反対の方向に左回りのものを「左巴」とされる説がある一方で、本来「巴」における左右の意味は、二つ巴の大太鼓(右側)と三つ巴の大太鼓(左側)を据える位置を示すものに過ぎず、その回転方向を示してはいないとする説もあります。後者の説は、「陰陽五行説」(右太鼓は陰《月》偶数、左太鼓は陽《太陽》で奇数)に基づくものです。



【四天王寺：火焰太鼓】
三つ巴、一對の龍、陽＝太陽＝男(左)



伊佐具神社屋根瓦
魔よけと防火の意